

確かに空気の震えとなり、鼓膜に突き刺さってくる。これが現実でなければ、自分の気が違ってしまったというのか。

「君は今こう思っているだろう。私が亡霊なのかこの教会の残滓なのか、それとも君自身の想像上の存在なのか」

カレンの疑問を受け流すように言峰は手を広げ、

「正直に言えば、私にも見当がつかん。つまりはそのどれもが正解であり、また間違いでもあるだろう。重要なのは私が君に見えているという事実だ」

そう言っただけで口端をあげてみせる。ほんの数分しか対峙していないというのに見知った姿に見えてしまうのは、バゼットから言峰の話を聞かされていたせいだろう。決して、自分の血が同調したのではない。

だから言峰の笑みの意味が自分にはわかる。こちらの苦痛を、内臓の叛乱と精神の抑圧のせめぎあいを愉しんでいる。仄暗い笑みに喉もとを絞めあげられるかのようだ。死してなお、生前の威圧と歪みをその姿にあらわしている。カレンは強くかぶりを振る。まともに相手をしてはならないと自分に言い聞かせる。現実の存在として接してはならない。詭弁に惑わされ、弄されては言峰の思うつぼだ。「私の目も相当弱っているようですね。人外の貴方が見え

るなんて——もつとも、貴方は生前から人でなしだったのでしょうけれど」

壁に手をつき、傾きがちな身体をカレンは必死に立て直す。脂汗が首筋を伝って服の中へと忍びこんでいく感触が気色悪い。血が流れないぶんだけ、この前よりはましだ。

「これは手厳しいな。流石は我が娘といったところか」

娘、という単語に言葉がつまる。わかっではいたのに、実際に言峰の口から聞くとさまざまな光景と思いが脳裏を通りすぎ、複雑な感触を残していく。父親という存在を頭で理解できるようになった歳にはもう、自分は捨てられたとも教えられていた。

「何をしに出てきたのかしら。もうこの教会は貴方のものではないはずだ」

「父親が娘の顔を見に来るのに、いちいち理由が必要だとは思えんがね」

露にも思っていないくせに正論を突く言峰の言いがカレンはどうしても気にくわれない。惑わされるまいとした決意が早くも揺らぎはじめた。

「確かに貴方は私の父親ですが、父親だと思ったことはいちどもありません」